

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 83

2022年2月



エルサレムの小学校のサマーキャンプ (キリスト教もイスラム教も子どもたちの間に隔てはない)

「ワクチン先進国」と言われるイスラエル。世界に先駆け3回目、4回目のブースター接種を行なっているにも関わらず、最近の感染者数は1日3万人を越えています。毎日、人口の300人に1人が感染していることになります。当NPOの現地スタッフ（32歳）も感染しましたが、入院できず自宅療養。1か月ほど咳や頭痛、全身の痛みに苦しみました。

2月15日、国道1号線で、数百両の車がイスラエル国会を目指してデモを行いました。「コロナ感染症に関するすべての規制を撤廃せよ、我々は生まれながらに自由だ!」とアピールしました。「ワクチン接種やマスク着用の強制や義務化は基本的人権の侵害だ!」との主張を理解できないわけではありません。しかし一方で、私たちはみな人と人とのつながりの中で生きる者。自分や隣人の命と健康を守り、互いの安全に気を配ることも大切ではないでしょうか……。

当法人は引き続き感染状況を見極めながら、活動を続けてまいります。一層のご支援をお願い申し上げます。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173

加入者名
「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

「平和を願う対話の旅」の延期について

2020年3月に予定していた「平和を願う対話の旅」は、出発直前のコロナ感染拡大で延期、2021年春もコロナ禍は収まりませんでした。

2021年秋に第4波が収まり始めた頃、2022年春には実施可能と見込んで計画を進めました。が、1月下旬、オミクロン株の世界的な拡大を受けて、再び延期を余儀なくされました。

2006年から続けてきたスタディ・ツアー、参加者の安全を最優先に、なんとか本年8月の実施を目指して、計画を進めてまいります。

皆様からいただいたツアー参加者へのご支援は、事前研修など再開に向けた準備、そして来るべきツアー本番で、有効に活用させていただきます。引き続きよろしくお願いいたします。

参加者は粘り強く研修を重ねています。2022年2月現在、以下の内容で実施しました。

◎ツアー説明会(オンラインで、計3回)

10月15日、10月30日、11月8日

参加者延べ55名の大学生、社会人。

当法人の紹介とミッション。ツアー目的と応募条件の説明。

◎応募者の書類選考と面接の結果、11人選出(大学生10人、社会人1人)

◎事前研修(対面とオンラインで、計4回)

第1回(対面) 12月19日(日)

講演「イスラエル・パレスチナ問題の基礎知識」
(当法人副理事長・村上宏一)

研修の課題を参加者に振り分け

第2回(オンライン) 1月8日(土)

メッセージ パレスチナ人ラナ・ランティシ(「平和の架け橋」プロジェクト参加者)による、
紛争とコロナ禍の現状報告

課題発表:イスラエル・パレスチナの歴史、エルサレム帰属問題 など

第3回(オンライン) 1月22日(土)

課題発表:入植地、パレスチナ難民、イスラエルの徴兵、分離の壁と検問所 など

第4回(オンライン) 2月5日(土)

課題発表:ホロコーストとユダヤ人、イスラエル・パレスチナの人権団体／学校の活動 など

スタディ・ツアー事前研修

イスラエル人とアラブ人の平和共存を目指して

「ハンド・イン・ハンド」学校の平和教育

江口真由(2022年スタディ・ツアー参加予定)

イスラエルにある「ハンド・イン・ハンド(手を取って)学校」での平和教育をご紹介します。これは1998年創立の私立学校で、ユダヤ人とアラブ人が同じ教室で共に学ぶことで、相互理解を深めることを目的とした取り組みです。

(注)イスラエルのアラブ人:1948年、イスラエルの建国宣言と同時に始まった第1次中東戦争の結果、翌49年に決められた停戦ラインのイスラエル側には、以前から住んでいたアラブ人の多くが残った。その数は現在、イスラエル人口の約20%を占める。イスラエル市民権を与えられたものの、ユダヤ人国家を標榜する国にあっては異分子的存在で、ユダヤ人との共存は難しい問題となっている。

学校の特徴は、ユダヤ人とアラブ人がそれぞれ半数ずつ、一緒のクラスで学ぶことです。イスラエルには約3000の小学校がありますが、アラブ人、ユダヤ人と、言語及び人種により通う学校が異なるのが普通です。そんな中、7校あるハンド・イン・ハンドの学校には幼稚園～高校の子供が約2000人在籍、授業では、ヘブライ語とアラビア語の2言語が使用されます。また双方の文化、歴史を学ぶことで、小さいころから互いを理解する機会を設けています。分断されているユダヤ系、アラブ系コミュニティの将来の懸け橋となることを願って、両コミュニティから子供たちを受け入れています。

そのうちの一つ、ワディ・アラ校について紹介します。この学校は、アラブ系住民が圧倒的多数を占める町にあります。ハンド・イン・ハンドの中で最初にアラブ地区にできた学校で、イスラエル国内でありながらアラブ系の子どもたちがユダヤ系の子どもたちを迎える形になっているのです。約200人の生徒がいて、実際には幼稚園～小学校課程の子どもたちが通っています。

学校では、以下の4つのスローガンを掲げて、子どもたちの目に入るのは皆、同じ人間であることを伝えています。

- ・ 相手を受け入れよう
- ・ 相手に平等な権利を与えよう
- ・ 相手と共に歩んでいこう
- ・ 少なくとも学校では、互いを知り、共同で生活することによって、平和は達成できる

こうした教育的価値観を、学校の授業を通して子どもたちに教え、お互いのパートナーシップと平等を構築することを目指しています。

しかしながら、それぞれの「民族」の記念日になると、対立感情が現れてしまうことがあります。例えば、イスラエルが1948年5月14日に建国を宣言した「建国記念日」（ユダヤ歴に従うので祝日は年ごとに異なる）は、ユダヤ人にとっては迫害と差別を受けてきた民族が安住の地を獲得した記念の日になります。一方、アラブ人にとっては多くの住民が家と土地を追われて難民になるなど、苦難の記憶につながり、翌日を「ナクバ（大厄災）の日」として、歴史を忘れないための記念日としています。

ハンド・イン・ハンドの学校では、こうしたユダヤ、アラブそれぞれの記念日や宗教的行事をユダヤ人、アラブ人の子供双方に体験させます。イスラム教の断食月「ラマダン」明け最初の食事のイフタールを学校で行ったり、ユダヤ教の「ラグバオメル」という、過越祭につながる宗教行事の焚き火を行ったり、シナゴグ（ユダヤ教会堂）に家族や宗教指導者が集まって行われるユダヤ教のお祝いに参加したりして、双方の歴史の理解を促進するのです。

ハンド・イン・ハンドのホームページには、7つある学校の詳細な様子が掲載されているので、ぜひ一度ご覧になってください。憎しみ合うのではなく、お互いを“知る”ことから平和の輪を広げる活動について、注目していただければ幸いです。



ハンド・イン・ハンド学校のホームページより。キリスト教徒もユダヤ教徒もイスラム教徒もいるので、様々な祝日を分かち合う。

2021年5月の空爆、その時 ガザは…

ガザに暮らす一青年の体験

高橋 彩子（2019年「平和の架け橋プロジェクト」参加者、2年前からスタディ・ツアーを待っている）

私は、当NPOのプロジェクトに参加したことが縁で2020年2月に国連の招待で来日したガザの青年3人を一日案内しました。その際ムハンマド（仮名）と友達になり、それから一年以上にわたってほぼ毎週ビデオ通話しています。いつも近況報告の後に私がアラビア語を教えてもらうのですが、ガザで起こっていることも詳細に教えてくれます。

2021年の5月にイスラエルとの間で「軍事衝突」（日本のメディアではこのように表現されるが、ムハンマドは「爆撃」「bombing」と呼ぶ。）が起こった際にも、事態が収まった数日後にガザの様子を説明してくれました。以下、ムハンマドの話をそのままお伝えします。

（注）ガザの人々は、本名や顔写真が公開されることを望まないため仮名を使いました。ご了承ください。

“ミサイルが降る夜”

あの日は、メディアの建物、政府の建物、民家、道やインターネットを含むインフラ、ありとあらゆるものがミサイルによって破壊されちゃったよ。しかもミサイルは、夜暗くなってからも発射される。

ミサイルが着弾した衝撃はまるで地震のようで、何も見えないから、全てが自分の数メートル先に落ちているように感じる。真っ暗で何も見えないからね。どの辺に落ちたのか見当もつかない。

程なくして電気・インターネットが落ちる。テレビもスマホも繋がらず、親戚や友人が大丈夫なのかもわからない。

想像してみても欲しい。あなたならこの状態で何を考えられる？

僕は、家族や友人のことを心配し、自分に問いかけ、祈ることしかできないよ。

友だちや親戚はみんなどうしているだろうか？大丈夫だろうか？どうか、無事でありますようにね。そして朝になって、ガザ全体が破壊されたと知るんだ。

ミサイルの音は夜中じゅう続いたから、その音が今

でも耳に残っているよ。

2歳の甥のイスハーク（仮名）もミサイルの音を覚えていて、真似もできるんだ。「イスハーク、ミサイルはどんな音？」そう聞かれるとイスハークは「シュー、シュー」と、落ちてくるミサイルの着弾前の音を真似てみせてくれる。まだアラビア語もしっかり話せないほど幼い彼が、ミサイルの音は再現できるんだ。

当時のガザの電力事情

Wi-Fi は二日目の夜から繋がらなかった。実際は繋がったり繋がらなかったりだったけど、どっちみち電波が弱過ぎていつも使い物にならないからね。

それから、電気は1日に4時間しか使えない。しかもその時間帯は日によって違うから、常に電気が使えようになったら何に使うか、常に準備しておかなければならない。いつ来るかわからないたった4時間の「電気を使える時間」に電子機器の充電から料理、シャワーも済ませないといけないんだ。例えばパンを焼きたかったらタイミングを見計らって作り始めないといけないんだけど、それが深夜になることだって珍しくないよ。



ガザの人口密度は世界でもトップレベル、何階もある高い建物に沢山の人が住んでいる。当然上の階に住んでいる人々は階段を下る必要があって、外に出るのにはある程度時間がかかる。

特に高齢者や体の不自由な人、子供たちなど、すぐに逃げろと言われてもその建物から素早く逃げるのは無理だ。たとえミサイル攻撃の標的となる建物が事前に特定されたとしても、彼らには逃げる時間はない。

しかも他に絶対に安全な場所はないから、怯えながらもそこにじっと居続けるしかないんだ。自分のところにミサイルが打ち込まれないようにと祈りながら……。

「すべて忘れたいし、次に進みたい。もう十分だ。」

ムハンマドが話の最後に語ったことばです。彼の言い方に怒りや憎しみという感情はあまり表れておらず、ただ、命が危険にさらされない当たり前の生活を願っている、そんな風に聞こえました。

この出来事は、アメリカやイギリスなどがイスラエルに防衛権があると判断したように、国際関係や国際法の視点から、国と地域の軍事衝突として正当性もあるかもしれません。メディアでは、このような政治的な見方が取り上げられる機会が多くあります。しかし他方ではミサイルが着弾した先には、ただ安全な日常生活を切に願っているムハンマドのような青年やその家族、親戚そして友人たちの暮らしがあるというのも紛れもない事実なのです。残念ながら、そのようなことはほとんど報道されません。

ムハンマドの生の声、彼の体験をぜひ多くの方々と共に共有したく、事前研修で発表し、「オリーブの木」読者の方々のためにもこの記事を書かせていただきました。



実際の被害

正面に写っているのは、僕が働くオフィスが入っている建物だ。最上階とその下の階、合計2階分がミサイル攻撃で吹き飛ばされてしまった。建物の中にはひび割れとかもあるけど、一階は使えるし、他に仕事ができる場所もないから、まだここで働いている。

次の写真も被害を受けたガザの様子、画面手前から奥に向かって道路が続いているが、一面瓦礫に覆われていて、車が通ることもできない。

日本人青年、エルサレム旧市街へ初めて買い物に

矢加部 真怜 (2014年スタディ・ツアー参加者) のFacebookから

東京外国語大学(トルコ語)を卒業し、トルコ留学、アンカラの日本大使館勤務を経て、今年2月初め、あるNPOのスタッフとしてエルサレムに派遣された矢加部真怜。赴任して初めて一人暮らしを経験した日本人青年の驚きや感動をユーモラスにつづっています。(彼には、出発直前まで当NPOのためにいろいろと協力してもらいました)

僕「アッサラーム・アレイクム!(ドヤ顔)」*

*アラビア語の「こんにちは」(直訳は「あなた方に平和があるように」)

店員のおじさん「ペラペラペラ」

僕「あっ、あっ、え〜。(しどろもどろ)」

上記のやり取りを4、5回繰り返した挙句の戦利品は以下のとおり。

1. エルサレム・ベーグル

外はパリッと、中はもっちり。胡麻が香ばしい。旧市街の道端でも売っているポピュラーなパン。なお単身者には大きすぎる模様。



2. アラビック・コーヒー

近所の店で挽きたてを売ってくれる。トルコ・コーヒーと同じように片手鍋で煮出して飲む。袋の香りがとてもすてきで、シンナー中毒者のようにずっと嗅いでられるけど、土地柄、通報されたら面倒なので自重。



3. 野菜と果物

中東の夏野菜のクオリティーはすごい! ツヤツヤの丸々と太ったナスは、オリーブオイルをたっぷり使って調理したい! 肉厚で甘いパプリカは、洗って丸かじりがベストな食べ方。異論は認めるが。



4. 緑オリーブ

テルアビブの空港からエルサレムの町に向かう道から、何よりも目に付くのはオリーブの段々畑。早速スーパーで買い求めて意気揚々と帰宅し、「やはり本場の味は違う!」と口に放り込みながらラベルをよく見たら、モロッコ産だった!



5. 塩

塩を買った。大家族が多い

アラブ人家庭に合わせてなのか、kg単位でしか売っていない。紙パックだから湿気が心配。

6. フムスとヨーグルト

一人暮らしなのにこんな大きなポリ容器で買ってしまったわけだが、エルサレム到着以来、食事の度に食べているので、減るスピードも中々。食べる前には「もう飽きた!」と思っても、いざパンに塗って食べ出すと止まらないほど。中毒性がある!



フムス(左)はひよこ豆のペースト。中東や地中海地域の典型的な家庭料理。

ヨーグルトは甘くないので、デザートではなく食事のおとも。アラブ料理は重たいから、これが必須。

7. 羊の脳みそのソテー

ケバブ屋でたまにサンドイッチにして売っている。癖のない白子みたいで美味。



番外編: ジャム

トルコ製で、慣れ親しんだジャム。エルサレムはパンの種類も数多ければ、フムス、ジャムとパンのお供のレパートリーも豊富です。



イスラエル新政権で どうなるパレスチナ和平交渉

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

2019年4月、19年9月、20年3月、21年3月と、2年間に4回も国会議員総選挙が行われたイスラエル。21年6月に誕生した新政権は右から左まで主張が異なり、さらにアラブ政党まで含む8政党による連立政権です。私たちが注目するパレスチナ和平交渉をめぐっても、閣内の対立が表面化しないか、ヨルダン川西岸の併合問題やユダヤ人入植地政策がどうなっているのか、などが気になります。

主張異なる連立8政党

連立政権の政党間の政策がどれほど隔たるのか、改めて見てみましょう。

国会の120議席のうち62議席と、かろうじて過半数を確保した与党を成すのは次の8政党です（カッコ内は国会での議席数）。

ヤミナ（7）

右派から極右までの国会議員を抱え、当コラムでは以前「右派連合」と表記していました。首相に選ばれたベネット党首は熱心なユダヤ教徒で、ユダヤ教の教義を重視する立場。ただし、神学校生の兵役免除には反対しています。パレスチナ国家に反対し、入植地の拡張と占領地の併合を主張。

イスラエル我が家（7）

右派。支持層に多いロシア系移民は、宗教面でしばしばユダヤ人としての「正統性」に問題があるとされ、そのためか、神学校生の兵役免除には強く反対。宗教政党との連立を拒否したことが、ネタニヤフ政権の継続を阻む一因となりました。対パレスチナでは強硬派であるだけでなく、イスラエル国籍のアラブ人に対してもユダヤ人国家への忠誠を要求。ユダヤ人とアラブ・パレスチナ人を分離すべきだという立場からの二国家案を掲げています。

新たな希望（6）

右派。党首のサル氏（注）はネタニヤフ前首相の率いるリクードを離脱して新党を設立したのですが、入植地政策の推進などリクードの主張と大差はありません。

イエシュ・アティッド（17）

中道。宗教派の優遇に反対する市民を代弁するとし、神学校生の兵役免除には反対。その点でヤミナ

とはかつて、ネタニヤフ前首相の連立政権内で連携したことがあります。パレスチナ国家の成立による二国家共存を支持。

青と白（8）

中道。政策では内政に重点、パレスチナ問題では和平交渉の再開を主張する一方、イスラエルの安全保障を強調しています。

労働党（7）

左派。シオニズムの建国理念に基づく社会民主主義政党で、1977年まで首相はすべて労働党系でした。イスラエルの安全保障のためにはパレスチナとの恒久和平が必要、との立場から和平交渉を支持しています。

メレツ（6）

左派。イエシュ・アティッドと同じく宗教的規制に反対する世俗主義。パレスチナ問題では二国家共存による和平を支持するほか、入植地建設の凍結を主張しています。

ラアム（4）

当コラムでは「アラブ連合」という表記で紹介していた、イスラム教の教義を重視する政党です。アッバス党首は、左でも右でもなくイスラエル人としてのアラブ住民の利益を考えると、党の立場を説明。パレスチナ国家の樹立と入植地の撤去を主張しています。

様々な局面で主張の差

2021年3月の総選挙につながったネタニヤフ政権の崩壊は、前年12月の国会で提出した予算案が承認されなかったからでした。連立与党間の意見の対立で、期限内に予算案を通過させられなかったのです。ベネット新政権の結束が試された2022年度の予算案審議では、21年11月に賛成61、反対59という僅差ながら国会で承認され、解散総選挙という事態は避けられました。

連立与党の連携は保たれたわけですが、党派間の色合いの違いは隠しようがありません。

9月13日にベネット首相がエジプトを訪問し、シ大統領と会談した時のこと。エジプト側は、イスラエル首相として10年ぶりとなる公式訪問をした



閣議に臨むイスラエルのベネット首相（左から2人目）
＝中東情報メディアAlMonitorから

ベネット氏を、下にも置かぬ扱いで歓待したようです。与党内の左派からは、アラブの主要国であるエジプトとの関係強化こそ対アラブ外交の成果であると、評価する声がありました。しかし右派陣営からは、会談でガザ問題や対パレスチナ関係、イラン問題などを話し合いながら、ガザを実効支配するイスラム原理主義組織ハマス为非難しなかったと非難されたり、冷淡な反応を示されたりしました。

閣外からも、ネタニヤフ前首相が、この首脳会談はパレスチナ問題にスポットライトを当てさせたと指摘し、与党内のパレスチナ和平に反対または消極的な議員らの感情に揺さぶりをかけるような動きを見せました。

パレスチナ問題といえば、パレスチナ自治政府のアッバス議長は12月末、イスラエルのガンツ国防相の自宅を訪問しています。国防省は12月28日の声明で「両者は治安および民生の両面にわたって協議した」と発表。その中で、ガンツ国防相が「前回の会談で約束した通り、経済面や民生面の信頼の強化に努めるつもりだ」と語った、と伝えました。これを裏付けるかのように国防省は会談の翌日、パレスチナ側との信頼醸成措置として、自治政府の代理で徴収した税金の引き渡しと、パレスチナ人の商業関係者のイスラエル入りに追加承認を与えた、と発表しました。

和平交渉は2014年に中断されたままで、このレベルの会談は最近では異例のことですが、アッバス氏のイスラエル訪問に先立つ8月下旬に、ガンツ氏の方が西岸ラマラのパレスチナ自治政府を訪れてアッバスと会談していたのでした。

しかし、ベネット首相は12月の会談の直後、パレ

スチナ側との和平交渉には何の進展もないし今後もないだろうと、くぎを刺す発言をしています。

変わらぬ入植推進政策

昨年10月、イスラエルのエルキン建設住宅相（新たな希望）は西岸の入植者住宅1,355戸の増設計画を発表、「西岸のユダヤ人の存在を強化することはシオニズムにとって重要なことだ」と述べたそうです。

イスラエルの占領の実態を調査し続けているイスラエルの人権団体ベツェレムによると、西岸の入植地は東エルサレムを含め200カ所以上、人口は62万人を数えるといいます。この団体によると、入植者がパレスチナ人のオリーブの収穫を妨害する事件が昨年10、11月の間だけで45件起きたといいます。暴力で危害を加える、畑を荒らす、農耕施設を破壊するといった行為で、これを阻止しようとするパレスチナ人を、イスラエル兵は催涙ガスやゴム弾で追い払ったり連行したりしているといいます。

今年に入っても、入植者によるオリーブの収穫の妨害、パレスチナ人の土地収奪などが何件も報告され、いずれの場合もイスラエル兵による事実上の入植者支援が伴っています。それだけでなく、イスラエル軍は軍事訓練の名目でパレスチナ人の農耕地を砲撃で破壊する、ということまでしているのです。

西岸を拠点に現地の情報を書き続けているイスラエルの新聞記者アミラ・ハスさんは、入植者の暴力を「イスラエルの制度化された暴力の付属品のようなもの」と位置づけています。例えば、あるパレスチナ人村で遊園地を建設していると「許可を得ていない」としてストップをかける。また、前述のように入植者の無法は放っておいて、衝突が起きるとパレスチナ人を近づけないようにして土地収奪を助けるという構図を指しているわけです。

入植地の維持・拡張政策をとり続けたネタニヤフ首相率いる右派連合政権が消えたものの、後を継いだ政権も首相は入植地積極推進派であり、同じ主張の党派が連立維持に必要な議席を握っています。入植者たちはこんな状況に意を強くしてか、パレスチナ人への圧力を強めているように見えます。

エルサレムに雪が降ったよ



エルサレムの美しい雪景色（遠くの山はオリーブ山）



雪だるまを作って得意顔
（ラサル学院の生徒たち）



初めての雪に大喜び（エルサレムでは、雪が積もるのは数年に一度）

大好きなクレール先生と



聖ヨゼフ学院とラサル学院との
交流イベントで。



エルサレムの小学校のサマーキャンプで。

みんなの笑顔に、スタディ・ツアーでもう一度



2019年のスタディ・ツアー：日本人学生は学校訪問で生徒たちと歌合戦をして楽しんだ。



▲ ラサル学院の生徒たち（エルサレム旧市街の西の城壁およびケドロンの谷を背景に）

◀ サマーキャンプでの幼稚園児